

第 62 回神奈川建築コンクール 住宅部門 最優秀賞選評

「THREE-FAMILY HOUSE」

審査委員 田井勝馬

3層の重層長屋の計画である。一見、これと言ったプラン形式や、目を見張る建築形態の操作を行なっている訳ではないが、建築を構成する基本単位である空間のディメンジョン、開口部の大きさ・ポジション等、一つ一つ丁寧に読み解き創り上げていることの強さと、それによって生まれる心地良い空間が創出されている。小さい頃から慣れ親しんでいた地の利もあってか、周辺環境を読み解き生活者に寄り添って行われた設計であり、生活者の目線として心地良いと思われることを普通に建築家の視点とスキルによって空間を構成したことが、この建物の特徴であり最大の強みであるといえる。

敷地を俯瞰的に見てみると、周囲には建物が建て込んでいるものの、庭を持つ戸建住宅が多く、心地良いすき間が随所に点在している。この敷地の南北にも比較的大きな庭が隣接していて、この計画のポテンシャルを増幅させている。都市部の集合住宅において、最下階の通風や採光は厳しいところがあるが、この計画の特徴は何と言っても1階の居住性にある。平面形をずらすことによって生ま

れた隙間が、南北に空いている隣地隙間と連続して空間的な広がりをもたらし、奥行きが深い部屋にも採光が入り、軽やかな風が流れる設計となっている。

また内部は奥に行くに従って段階的に天井高を高くし、大きな高窓を取ることによって陽射しを十分に確保しつつ、お隣の庭越しに空へと視線が抜ける開放的な内部環境を創り上げている。また2階床を構成している梁材は、構造上必要な量の倍ピッチで入れることにより、奥行き感の視覚的効果と上階からの重量衝撃音の軽減効果を見込んだ木造の冗長性の両面を捉えている。

この天井高のスキップした構造形状は上階の床レベルへと転化され、同じ平面外形をもつ3層の住宅に異なった個性的なプランと住環境を生み出している。2階、3階へと上がるにつれて周辺環境も変化し視界の抜ける方向も異なり、自ずと玄関位置や開口部の大きさ・ポジションも変化して行く。この当たり前のことのように思える周辺の事象を丁寧に読み解き、設計へと解いた結果が見事に心地良い空間となって設計されている。